

ぐじゅうを愛したお殿さま

入山公

山好きの皆さん、自分が死んだあとは大好きな山で眠りたい、なんて思ったことはありませんか？でもさすがにぐじゅうの真つただなかにお墓を建てるなんてできませんよね。でもその山好きの純粹な願いを叶えた人が江戸時代にいました。岡藩3代藩主、中川久清です。今号の特集は、「入山」と号した彼と、彼の愛した大船山の紹介です。

江戸時代、ぐじゅう連山は大きく3つの行政区間に分かれています。飯田高原などぐじゅう北西部は幕府領日田代官所、久住山など南西部は細川氏の肥後熊本藩54万石、そして坊ガツルから大船山など東部は中川氏の豊後岡藩7万石に属していました。

* * * * *



江戸時代のぐじゅう周辺
(国土地理院電子地形図に加筆)

岡藩の3代藩主中川久清は、1615年、2代久盛の長男として生まれました。1653年に父の跡を継いで藩主となり、藩政の確立と教育の普及に努めた名君とされています。1666年に52歳で家督を4代久恒に譲り、81年に67歳で亡くなりました。ぐじゅうのかかわりでは、大船山に繰り返し登ったほか、11代勝光院豪尊の時代の法華院を手厚く庇護しています。七里田温泉に御茶屋を整備して湯治にも訪れたそうです。

* * * * *

防火帯切りは徹底的に

ぐじゅうの春は野焼きから。入山公廟は野焼きがおこなわれる場所に近かったからでしょう。

岳麓寺 うか、火災予防が厳重におこなわれた

ようです。毎年170名の人足が刈り

出され、廟の周囲約1kmの草刈りに当たりました。そのうち幅50~150m強の範囲は鍔で削り取るという徹底ぶりです。しかしこれは1750年ごろの記録で、1830年ごろには「森の中だった」という記録も残っています。



▲入山公が奉納した鏡。「入山」の文字を図案化している。(竹田市歴史文化館蔵)

1653年と1666年に大船山に登ったことでも助けになつた。1666年に52歳で家督を4代久恒に譲り、81年に67歳で亡くなりました。ぐじゅうのかかわりでは、大船山に繰り返し登ったほか、11代勝光院豪尊の時代の法華院を手厚く庇護しています。七里田温泉に御茶屋を整備して湯治にも訪れたそうです。

* * * * *

久清は隠居時に「入山」と号し、「入山公」と呼ばれたほどの山好きで、ぐじゅう連山、なかでも大船山を愛し、たびたび山に登りました。といつても今の登山のように自分の足で歩いたのではなく、屈強な領民が背負う人馬鞍に負わされての登山です。足が悪かつたことに加え、身長150cmほどと小柄だったことも助けになつたことでしょう。

* * * * *

自分で歩いていないとはいっても、この時代、修驗道でも所領境の調査でもなく純粋に「山が好きだから」という理由で、標高1700mを越える山頂まで登山に行く人はそういなかつたに違いありません。何が入山公を山へと向かわせたのである遺言を残し、翌年亡くなると、遺言通り鳥居が窪に葬られました。標高はおよそ1400m。大名のお墓としては日本一標高が高い場所とされます。入山公廟は「岡藩主中川家墓所」として1997年に国の史跡に指定されました。

* * * * *

昔も今も、山は人を惹きつける何かを持つているのでしょう。今年は山の日の記念式典がぐじゅうを中心に開かれます。

もし入山公が出席したら、ぐじゅうに魅せられた彼のこと、きっと山の魅力について大いに語ってくれることでしょう！



中川久清肖像
(碧雲寺蔵)

入山公廟にテ行ってみよう！

大船山の登山バスは、2020-21年の間運休中（2021.6.20現在）。運行されていればバスの終点から約40分で着くのですが…。バス以外のルートでは、岳麓寺登山口が最も便利でしょう。七里田温泉に近い登山口には車10数台分の駐車場があり、そこから舗装された牧野道を登ります。「柳が水」分岐を経て登山口からおよそ2時間の登りで到着となります。途中には見晴らしのいい場所も多く、気持ちのいい山歩きが楽しめるでしょう。

入山公廟からの展望は素晴らしいの一言。近くにある

岩に登ると久清が治めた岡藩が一望でき、その向こうに祖母傾連峰が連なります。右には噴煙を上げる阿蘇山。

振り返ると大船山が大きくうずくまるようにたっています。「ここがいい！」と感動した入山公の気持ちが時代を超えて伝わるような場所です。

入山公廟から大船山頂へはさらに1時間半近くかかります。傾斜も徐々に急になりますので、準備を万端にして登ってみましょう。

京から石をはこぶ

入山公の墓所は石積みの基壇の上に墓石が設置されています。墓石はかまぼこ型のちょっと変わった形で、これは儒葬式

のつくりです。本人のお墓のほかに、幼くして亡くなった六男久矩、

四女井津姫のお墓もそばに建てられました。わざわざ京都から取り寄せた石も使われています。ただ登るだけでもたいへんな山の中に、京都から石を運んできたというのも驚きですね。完成当時は御靈屋も造営され、多くの参詣者に対応するために番所・番人までがおかされました。

山を恋ううた

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に
しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。



防火帯切りは徹底的に

ぐじゅうの春は野焼きから。入山公廟は野焼きがおこなわれる場所に近かったからでしょう。

岳麓寺 うか、火災予防が厳重におこなわれた

ようです。毎年170名の人足が刈り

出され、廟の周囲約1kmの草刈りに

当たりました。そのうち幅50~150m強の範囲は鍔で削り取るという徹底ぶりです。しか

しこれは1750年ごろの記録で、1830年ごろには「森の中だった」という記録も残っています。



▲入山公が奉納した鏡。「入山」の文字を図案化している。(竹田市歴史文化館蔵)

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。

もとむべき かくれがもなし おのづから 山よりおくの山を心に

しづかには 住えましとは おもへども 山より山のおくをたづねん

彼が心に抱いた「山より奥の山」こそが、生涯愛した大船山だったのでした。

久清が詠んだ歌二首が、御肖像軸の上部に書かれて残っています。